

詠詠年刊

二月号



花鳥詠詠

2月号 (431号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠®

令和 6 年 2 月 ■ 第431号 ————— 目 次

花鳥諷詠選集	岩岡 中正 2
	阪西 敦子 4

一頁の鑑賞	石井 宏幸 8
	新家 月子 9

この人の作品	田中 黎子10
--------------	---------------

卯浪	11
----------	---------

新春特別座談会

日本伝統俳句協会と虚子門（2）	12
-----------------------	---------

虚子研究 『六百五十句』 研究（48）	19
---------------------------	---------

俳句が上手くなるオンライン講座

「茶道で学ぶ衣食の季節」参加記②	前田 千24
------------------------	--------------

書評	27
----------	---------

風報	28
----------	---------

地区行事開催日程表	31
-----------------	---------

編集後記	32
------------	---------

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 「ホトトギス」大正4年6月号より。小川千堯画「ごんどら」。

花鳥諷詠選集

● 岩岡中正選

特選五句

観月に隣家の客となりにつけり

指宿難波 真由美

分校は島の礎 新松子

糸島宮脇 睦子

姉らしく妹らしく七五三

阿南湯浅 芙美

無造作に取り外されし古暦

高松岩瀬 良子

丹精の頂競ふ菊花展

松江山根 正巳

二句短評

一句目——俳句は、ふとしたことに心動かし興がる詩である。いつも親しくしているお隣だが、今日は一寸あらたまって月見の会。日頃見なれた月を勝手知ったる隣家で観るのだが、このふとした心の張りがわれながら楽しく、月もまた新鮮。俳句はこのように、日常普段の小さな歓びを詠む詩である。

二句目——新松子の緑の充実が見えるようだ。島のこの分校で子らが育ち、ことあるごとに村人たちがここに集う。「島の礎」に、この島の歴史と物語がある。過疎なればこそ大事な分校。「新松子」が的確で、ここに未来がある。

入選六十句

新藁となるとき軽くなりにつけり 平川 丹野 慶子

御仏の秋思の指を頬に置く 京都 山崎 貴子

佇つ鷺の白を極めて水の秋 八尾 米澤 悦子

看取女に庭の千草と俳諧と 福山 世良 正子

山莊へ人声の来る小鳥来る 大阪 徳永由起子

放埒もまた風韻の朴落葉 大牟田 介弘 浩司

瘦せてゆく水音風音下り鮎 荒尾 大川内みのる

永らへてこそ今生の菊の酒 神戸 上岡あきら

村起しとて一面の蕎麦の花 福山 箱田富久恵

烏瓜引く俳人の好奇心 四国中央 豊田 耕造

全長のをさまるまでを穴まどひ 高松 白根 純子

鶏頭の種採少し零しおく 鳥取 高田 栄子

漱石忌あの気風のよき厠の句 高知 森脇 杏花

後の月天の句会に加はらな 東京 岩村 恵子

奮発の松茸飯の吹きあがる 高知 前田まこと

海光に枝さしのべて帰り花	西予	三瀬	教世
庭柿へ棹の長さを持て余す	習志野	大慈弥	爽子
笑ひ声ころがつて来る林檎園	堺	杉本千恵子	
月光を浴び体内に満つるもの	熊本	南野	幸子
開拓を捨つる夫婦へ鳴くふくろ	静岡	曾根	満
けふ一日大事に生きて散る紅葉	小郡	西田	淑子
音たてて橋駆け抜ける初時雨	野々市	辻	文江
声までも泥にまみれて蓮根掘	市原	飯塚	咲子
庭師来て十一月の庭となる	柏原	鈴木	輝子
松手入終へつくばひに水を張る	鹿児島	永井	紀子
活火山おだやかにして月の道	鹿児島	所崎	玲子
こんこんと秋水脈脈と句会	島原	八木	花栗
森抜ける落葉の音を違へつつ	芦屋	田村恵津子	
要領を得て二枚目の障子貼る	白山	鈴木	恵子
やはらかく風に乗りたる黄葉かな	横浜	守谷	一剣

公園の景色となりし朴落葉	金沢	川口	俊子
掃き寄する塵の中より冬の蝶	朝来	枚田登志子	
ご自由にお取り下さい柿たわわ	神戸	三木	雅子
俳諧は心の杖や翁の忌	佐賀	古庄たみ子	
母許の茶の花垣をぬけてゆく	四国中央	豊田みゆき	
今朝の冬ホットミルクに薄き膜	姫路	上原	康子
狛犬のぐつと踏ん張る神の留守	島原	中原	綾子
大空へ出でて舞ひたる落葉かな	北海道	安田	豆作
見つけてはまた見失ふ帰り花	神戸	池田雅かず	
燈台の輝きに鷹渡りけり	北九州	吉富	莞峰
かげといふかげをながして水澄めり	岡山	石井	宏幸
日時計の刻む薄日や冬に入る	神戸	光山	恵子
いますこし狭庭の落葉降るままだ	野洲	片山リツ子	
露坐仏の口元締まる神の留守	東海	夏目	惇子
沈むもの沈めて水の冬めける	西宮	山之口倫子	

● 阪西敦子選

特選五句

我家への案内図書いてゐる夜長

北海道 西 澤 カズ子

脱ぎすてし子のセーターのふと動き

東京 関 千恵子

白菊や誰ぞの訪ひし父の墓

福岡 山口 裕子

冬晴やこれから割れるしやぼん玉

市川 抜 井 諒 一

蓮の實の飛びて城影崩しけり

島 原 西 田 比呂志

二句短評

一句目——人を家と呼ぶ。きちんとした人にしかできないことだ。その上、案内図も自分で書くとは。書くからにはわかりにくいところなのだろう。すこし奥まったところにある家の一室の灯のものと書く地図。その地図の中には、今、地図を書くその部屋があつて……永遠に続くような構造が、夜長の感慨として新鮮だ。二句目——脱ぎ捨ててからどのくらいの後か。脱いですぐであつても、忘れたころであればなおさら、もう人の入っていないセーターが動けば、どきりとする。脱ぎ捨てたときの膨らみが崩れたただけだとしても、何かを感じさせるのだろう。その一方で、脱ぎ捨てた勢いや、来ていたときの快活さも十分に伝わってくる。

湯上りのやうに匂へる枇杷の花	松山 門田 智子
秋空へ再会の子の手を高々と	神戸 宮田マスヨ
秋灯や句集に偲ぶ御生涯	長岡 安井 里子
朝風や遠流の島の石路の花	那珂川 池田ひさ絵
枯葉散る森に光を撒くやうに	西宮 山谷 彰子
ふと思ひ出したる事や日向ほこ	広島 古川 東代
大根を洗ふ早瀬に日の翳り	名古屋 宮沢 素流
句に遊ぶことも勤勞感謝の日	吹田 河辺さち子
添削の一字に秋思はじまりぬ	南国 小島千鶴子
リハビリのマシン全力冬立ちぬ	豊中 北橋 晃子
フェリーより降ろす自転車島小春	鹿児島 森 志覚
綿虫の夢の続きを追ふ如く	神戸 明石 裕子
秋思ふと板チョコ二片折つてみる	福津 有島 洋子
綿虫に澄み切つてゐる空気かな	芦屋 山岸 正子
菰松の六百本の冬構	大分 村上 久子

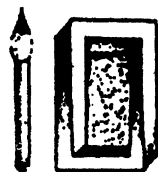
入選六十句

街灯のぼつりと峡の銀河濃し	高崎 塚越 章江
松手入空の広さを透かしけり	東京 荒井 桂子
新藁となるとき軽くなりけり	平川 丹野 慶子
行く秋や足六本の女郎蜘蛛	金沢 福島 広秋
旅人の装ひ十色園の秋	加賀 正藤 宗郎
溜池や初鳴の影雲の影	松山 篠原みどり
枝道は通行禁止木の実落つ	君津 榎本 静江
十本の桜紅葉にベンチあり	八王子 小町谷滋子
落花生抜くやゆらゆら土匂ふ	名古屋 斉藤 始子
石榴の実夕日ぐらりと落ちて行く	磐田 金田みな子
土曜日の交番の留守小鳥来る	大阪 ふじもと 言葉
猫の目が追うて落ちゆく桐一葉	高知 栗坂 海馬
眩しさに生れ大綿眩しさへ	松山 高橋 草天
杖引きて退院の途の木犀の香	仙台 安部 陽子
瘦せてゆく水音風音下り鮎	荒尾 大川内みのる

秋刀魚焼く隣も秋刀魚焼く匂ひ	浜松 朝井 治代
気配さへ見せぬ秋蚊に刺されけり	福山 池上 幸子
バスの窓動かず駅へ冬の蠅	金沢 田中 裕女
冬らしき風の形となつてきし	稲城 福島テツ子
セーターの色の溢れしカフェテラス	伊万里 萩原 豊彦
歎びの声天に地に鶴来る	下関 貞包 清子
鶏頭の種採少し零しおく	鳥取 高田 栄子
補聴器を外し月下の人となる	宇部 上田久美枝
停泊の白き巨船や石路の花	横浜 吉田 菊代
一枚は学習園といふ稲田	神戸 中井 陽子
あと先となりて落葉の風に舞ふ	香川 佐藤美沙子
名月の真つ正面にある夕餉	福岡 下原口允子
小鳥来る籍入れぬまま二十年	根室 前田 水絵
学園祭の賑はひよそに鴨浮寝	芦屋 長安 悦子

赤楽の十一月の重みかな	西宮	小林	志乃
おでん屋へ顔より先に声入り	太宰府	持永真理子	
音たてて橋駆け抜ける初時雨	野々市	辻	文江
声までも泥にまみれて蓮根掘	市原	飯塚	咲子
活火山おだやかにして月の道	鹿児島	所崎	玲子
束の間の茜極まる秋夕焼	大分	園田佳代子	
太閤の城借景に七五三	豊中	室田	妙子
目薬の一滴浸みる冬めく日	東京	不破	澄子
木の実皆名前と形持ちて落つ	糸島	小河美紗子	
要領を得て二枚目の障子貼る	白山	鈴木	恵子
さりげなく塵出す夫や初時雨	伊勢崎	飯塚	徳明
S邸の満艦飾の蒲団干し	流山	高良	楽水
陸に舟揚げたばかりや冬の雁	苦小牧	桂	せい久
かげといふかげをながして水澄めり	岡山	石井	宏幸

月見あげある間一片消えし雲	高知	中村	梅子
湯上りのやうに匂へる枇杷の花	松山	門田	智子
紫苑剪るスカイブルーの雨しづく	福山	杉原	芳子
車椅子の母はソプラノ秋桜	高松	井口	直美
川岸に小舟傾ぎて秋惜む	高松	福江	昌子
蓮の実の飛ばんとしては揺れ止みぬ	鹿児島	角屋敷昭子	
家中の風邪のしんがり貰ひけり	弘前	藤田	豊子
残菊や眸に母をとめ置きぬ	千葉	鈴木真沙枝	
初冬やまた新しき診察券	四日市	伊藤	和子
花マルを描く初冬のマヨネーズ	刈谷	稲垣三千代	
大根を洗ふ早瀬に日の翳り	名古屋	宮沢	素流
閉店の暖簾仕舞ひし時雨かな	大牟田	藤好	信子
フエリーより降ろす自転車島小春	鹿児島	森	志覚
山茶花の壊れてゆくや母の庭	さいたま	太田	野風
ラム肉に草の香ありて文化の日	東京	飯島	千青



編集後記

揮毫で句を鑑賞する醍醐味が出てくる。

の多様な意味を問う場です。
●顕彰事業も佳境を迎えました。協会賞は先月決定、稲畑汀子賞の応募もお待ちしております。

●外に向かつて協会の活動を広報することも大切ですが、今年は内の充実も目的としております。賛助会員の活動をお知らせする欄を企画いたしました。
(井上泰至)

能登半島地震で被災された皆さま、お見舞い申し上げます。被害を受けられた皆様の安全と一日でも早く平穏な生活に戻られますことを心よりお祈り申し上げます。

雨の中に立春大吉の光あり 虚子

「大」は本来撥る字ではない。ところが虚子の揮毫は右の払いの最後が若干撥ねていて、後にくる「光」の右撥ねの呼び出しになっている。こうして一句の眼目は、「光」であることが視覚的にも確認できるところに、虚子の

●百五十年前の二月二十二日、虚子はこの世に生を享けました。虚子記念文学館で来月から、その文学的出発をテーマに展示が行われるのに合わせ、オンライン講座を用意いたしました。「俳人虚子の出発―明治中期の足跡をたどる」

日時 三月一七日(日) 午後八〜九時
講師 田部知季(早稲田大学文学部講師)
詳しくは協会のホームページをご覧ください。

●新春座談会の二回目佳境を迎え、協会発足の事情が明らかにされています。啓蒙でもあり、文学的信念でもあった「花鳥諷詠」の多様さを実感していただければ、と思います。近づいてきました国際俳句シンポジウムもそ

花鳥諷詠二月号(通巻第四三一号)

定価一、〇〇〇円 但し、本代は年会費を含む
年会費一〇、〇〇〇円

令和六年二月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行人 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五四五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二